

い ん ろ う 印籠

平成27年7月28日(火)～8月30日(日)

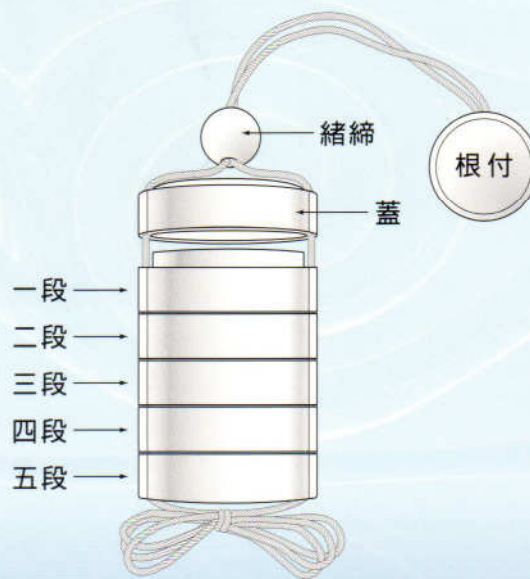
印籠は、常備薬を入れ腰から^さ提げて持ち歩くための容器として、近世初期以降、おもに武家や富裕な町人男性のあいだで急速に流行しました。実用性はもちろんですが、当初より装身具としての機能が重視されたため、表面には各種の工芸技術を駆使し、伝統的な美意識や、時代の好みを反映した魅力あふれる装飾が施されています。

当館は、平成25年度に約4000点にのぼる「根付・印籠コレクション(H-1869)」の寄贈を受けましたが、この中には約300点の印籠が含まれます。今回の特集展示では、その中からさまざまなタイプの印籠を選び、当館が以前から所蔵している「牧野義一^{まきの ぎいち}印籠コレクション」(H-1078)とあわせて公開し、都市を中心に華開いた豊かな生活文化の一端をご紹介します。数センチ四方の小さな印籠にみられる多様な素材や工芸技術、ウィットに富む装飾デザインなどをご堪能ください。

印籠とは？

印籠は、通常三段から五段重ねの小型の容器を紐で連結した形式に作られ、紐を調節するための「緒締」と呼ばれる玉と、腰帯に挟んで提げるための「根付」が附属します。

その名称は、中世に唐物として将来した印章や印肉をおさめるための数段重ねの丸い大きな容器の名に由来しますが、いつの頃からか、腰から提げる薬入れを、印籠と呼ぶようになりました。『日葡辞書』(1603年刊)の「Inro」の項に、「薬その他の物を入れる小箱」との説明があるように、主として携帯用の薬入れとして発達しましたが、薬以外の物を入れることもあったようです。



一般的な印籠の形式



雲龍蒔絵印籠

円筒形の重ね箱の側面に紐通しの金具を付けた形式の印籠。

印籠の歴史

『日葡辞書』の記載のほか、桃山時代の風俗画の中に印籠を提げた人物がしばしば描かれていることから、慶長年間（1596-1615）ごろには、印籠はかなり普及していたと考えられます。現存する古い印籠の実例としては、寛永13年（1636）に歿した伊達政宗の墓所から発掘された菊の蒔絵の模様のある小振りな印籠（瑞宝殿資料館）や、毛利元就の孫にあたる毛利輝元（1553-1625）所用と伝えられる波千鳥蒔絵印籠（毛利博物館）などが知られています。



輪舞遊楽図屏風 右隻および部分

印籠や巾着、瓢箪などを腰から提げた伊達男の姿が表されており、印籠には、当初より装身具としての役割が強く求められていたことが知られます。

多彩な素材と技法

印籠の素材は、木製漆塗のほか、革・竹・金属・牙角・焼きものなどにわたり、蒔絵・螺鈿・各種の象嵌・彫漆など、高度な工芸技術を駆使した多種多様な装飾がほどこされました。同じ提げ物の中でも、煙草入れが庶民のものであったのに対し、印籠は主として武士によって用いられたため、蒔絵などの精巧な技術を用いた格調高い装飾が好まれたのです。

なすまきえいんろう
茄子蒔絵印籠

蒔絵とは、漆で文様を描き、乾かないうちに金銀粉などを蒔きつけて、固着させる技法です。蒔絵粉を蒔いたあと、全体を漆で塗り込めてから均一に研ぎ出す繊細な研出とぎだし蒔絵の技法が用いられています。



はなかごまきえしげやまぞうがんいんろう
花籠蒔絵芝山象嵌印籠

貝、象牙などの素材をレリーフ状に彫刻し、漆塗の表面などに象嵌する華やかな芝山細工は、幕末から明治にかけて流行し、海外にも輸出されて好評を博しました。



ぐりもんついでいんろう
屈輪文堆朱印籠

彫漆とは、厚く塗り重ねた漆の層をレリーフ状に彫り込んで文様を表す中国の技法で、赤いものは堆朱ついでと呼ばれますが、日本でもこの技法を模倣して印籠が作られました。



ろうかくさんすいじんぶつづいきんいんろう
楼閣山水人物堆錦印籠

漆に顔料を練り込んでつち槌で叩き、薄く延ばした餅状のものを貼り付けて装飾する琉球特有の技法で作られた印籠です。

洒落のデザイン

質素儉約を旨とし、奢侈を禁じた江戸時代の男性の装いにおいて、趣向に富み、技巧を凝らした印籠は、小さいながらも持ち主の個性を主張するアクセサリでした。印籠の意匠には、幸運を祈る吉祥の主題はもちろんのこと、季節に対する鋭敏な感覚や、古典への教養、新しいものへの好奇心などが反映されています。



張良黄石公象牙彫印籠

漢の高祖（劉邦）に仕えた若き日の張良が、在野の兵法家黄石公から秘伝書を伝授される逸話は、能楽の流行とともに普及し、武家好みの主題として工芸意匠にしばしばとりあげられています。



表



裏

野馬図蒔絵印籠 銘「観松齋（花押）」

表は金地に水墨風の馬の蒔絵、裏は黒地に銀蒔絵で、屏風の裏紙に表される鳥禪文を表し、金屏風見立ての意匠としています。

海を渡った印籠

小型で精巧な工芸品は、外国人の目にとまり、とくに明治時代以降は、日本美術愛好家たちの蒐集対象となりました。ジャポニスム運動の強力な推進者として知られ、雑誌『ガゼット・デ・ボザール』の編集長でもあったルイ・ゴンス（Louis Gonse 1846-1921）の日本コレクションは、印籠から始まったと言われます。エキゾチックな工芸品としての印籠・根付の人気の高まりとともに、新たに外国への輸出を意識した印籠も製作されました。



鴨蒔絵螺鈿象嵌印籠 銘「観」

蒔絵に鉛・貝・陶器片などを象嵌する笠翁細工による印籠は、海外でも人気を呼びました。1924年に行われたルイ・ゴンスのコレクションの売立目録に写真入りで掲載された印籠です。

桔梗蒔絵螺鈿印籠 銘「法橋光琳造」

アメリカの宝飾デザイナー・ガラス工芸家、ルイス・カムフォート・ティファニー（Louis Comfort Tiffany 1848-1933）旧蔵の華やかな印籠です。



今後の予定

第3展示室 特集展示

「泥絵と江戸の名所」

2015年10月20日(火)～2015年11月23日(月・祝)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立歴史民俗博物館

NATIONAL MUSEUM OF JAPANESE HISTORY

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117番地 / TEL 043-486-0123(代)

お問い合わせは ハローダイヤル 03-5777-8600

れきはくホームページ <http://www.rekihaku.ac.jp>

発行日：2015年7月28日